

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2017

課題番号：24520835

研究課題名(和文) 十八世紀末ウィーンにおけるメディアとしての銅版画

研究課題名(英文) Etching as visual medium in Vienna around 1800

研究代表者

山之内 克子 (YAMANOUCHI, Yoshiko)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：70267441

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ヨーゼフ二世の治世(1765/80-1790)は、ハプスブルク君主国において、あらゆる領域で急激に改革が導入され、社会全体が大きな変化に直面した時代であり、さまざまな形態の印刷物が、新しい知識と情報をより広い社会層へと伝えるメディアとして機能していた。本研究では、識字率がきわめて不確実なこの時代を調査するにあたり、あえて「活字印刷物」の枠組みを離れ、銅版画という画像印刷物に着目した。ウィーンで活躍した銅版画家レッシェンコールの作品を中心に、現地の博物館に未整理のまま眠る通俗グラフィック作品を調査し、データベース化して分析することで、メディアの多様性、印刷物消費の実態に迫った。

研究成果の概要(英文)：The Josefinian era refers to two decades in the history of Habsburg Monarchy marked by reforms, the renovation and modernization. At that time many kinds of printed matters played a vital role in spreading new knowledge about Enlightenment. However, as the literacy rate may never have gone up to 50%, even in the big cities like Vienna, we should not overestimate the value of books, newspapers and journals in the whole society. This research project started from hypothesis that the graphic arts, especially etchings, had also an important function as vehicles for the ideas of Enlightenment. To achieve this aim the works of the famous print maker Hieronymus Loeschekohl in Vienna were analyzed.

研究分野：西洋史学

キーワード：オーストリア ハプスブルク君主国 印刷文化 識字と読書 銅版画 民衆文化 消費文化 啓蒙主義

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 出発点: 読書と識字

研究代表者は、ウィーン大学での博士論文(1997年)以降、長期にわたって、18-19世紀、とりわけ皇帝ヨーゼフ2世の治世期(1765/80-1790年)のウィーンにおける書籍出版、印刷および、識字と読書の歴史についての分析・研究に従事してきた。啓蒙君主を標榜したヨーゼフ2世のもと、統治と政治だけでなく、社会、経済、信仰、文化にいたるまで、あらゆる領域において急速な改革と刷新が導入された当時、通俗読物=パンフレット(Broschüre)をはじめ、さまざまな形態の印刷物が、より広い社会層に新たな知識と情報を伝えるメディアとして機能していた。高い美学的価値を備えた文芸のカテゴリーには決して括りえないこうした印刷物こそが、プロテスタントの北方ドイツから遅れること約一半世紀にして訪れたウィーンにおける「啓蒙の春」の、そのリアルな姿に迫るための格好の史料と考えられたからである。

とりわけ「啓蒙の受け手」に対してアプローチを試みる者にとって重要な関心領域となるのが、これらの印刷物の「読者」の存在であった。だが、通俗印刷物に関して「誰が手に取り、頁を繰ったのか」という問いかけをしようとするとき、18世紀には未だ5割に達しなかったとされる識字率、そして、一冊10クロイツァーというパンフレットの価格が、その「読者グループ」をおのずと狭く限定してしまうことになる。

このような問題を経験するなかで、新しい分析の可能性を内包する史料として、銅版画を中心とする画像印刷物のあり方が、かねてから代表者の関心を惹きつけていた。ウィーン市立図書館長のシルヴィア・マツル＝ヴルムら、現地の研究者の間では、18世紀ウィーンに「絵を読む人びと」が確実に存在していたことが、しばしば指摘されてきた。また、フランツ・グレップナーをはじめ、同時代人の回想録や文化史的評論でも、さまざまなグラフィック作品が広く言及されている事実は、画像作品が18世紀後半からピーターマイヤー期にいたるウィーンの郷土史および民衆文化において欠くことのできない重要なファクターであったことを明徴するにほかならない。こうしたことから、代表者は、史料とメソッドが整い次第、研究対象を新たに「活字によらない印刷物」へと拡大することを企図するようになった。

### (2) 史料調査準備

パンフレットと同様、従来、芸術的価値を認められてこなかった通俗銅版画に関しては、体系的な先行研究はもちろん、収蔵場所での作品整理もほぼ手付かずで、また、制作者についての伝記的データもほとんど知られていない状況にある。そのなかで、ヨーゼフ2世時代のウィーンでもっとも活躍した版画家・出版業者、ヒエロニムス・レッシェン

コールについては、ウィーン市立博物館において1959年と2009年、2度にわたって回顧展が行われ、図録も編まれていた。レッシェンコールの銅版画作品は、啓蒙期の改革や社会の変化を風刺的に描くという点から見ても、これまで蓄積してきた「活字印刷物」と比較対照するという目的にもうまく合致するものであった。2010年から2011年にかけて、神戸市外国語大学の在外研究員としてウィーンに研究滞在した際、代表者は、ウィーン博物館の研究閲覧室および、アルベルティーナ・グラフィックコレクションの閲覧図書室において、レッシェンコール作品の基礎調査を試みた。ウィーン博物館にはレッシェンコールの作品を収めた8点のケース、アルベルティーナには匿名作品を含む2冊のバインダーがあり、ここに半ば未整理のままとめられたオブジェクトは、1959年の回顧展に際してペーター・ペッチュナーが編んだ作品目録が網羅しえなかった画像をも、数多く含んでいた。この予備調査において、一部の作品の作業用写真撮影まで終えることができたため、ここに収集された情報をベースとして、画像印刷物に関する研究計画を本格的に立ち上げる段階に達したと判断した。

## 2. 研究の目的

前述のように、本研究計画は、研究代表者が手がけてきた啓蒙期ウィーンの識字および読書文化研究のプロセスのなかで、新たな問題提起として派生したものである。これまでの研究の中心をなしてきた民衆的印刷物、パンフレットをめぐる分析は、ドイツ諸邦のように突出した作家・思想家を生み出すことがけっしてなかったオーストリアの文芸界において、これらの通俗読物が、民衆演劇やさまざまなスペクタクル等、ウィーンの伝統的基底文化との深い関連性のなかに、時として北部ドイツの知識人をはるかに上回るほどの強い社会的アンガージュマンの志向を保持しながら、啓蒙主義をきわめて広い社会層へと伝播させる媒体としての役割を果たしたことを確認した。

しかし、一方、この伝播の過程に目を移すとき、当然、パンフレットが伝える情報の受け手および、受容のかたちが問われることになる。とりわけ、独自のカトリック的、バロック的基底文化を醸成してきた都市ウィーンでは、すでに16世紀より組織的な識字教育を体験していたプロテスタント地域と比べて、活字文化そのものが、まったく異なる位置価値をもっていたはずである。旧来の研究のなかには、音楽、演劇、見世物など、都市に古くから伝わる豊富な娯楽の可能性が読書文化と競合し、ウィーンにおいて本格的な文芸が根づくのを妨げることになったと結論するケースもあった。これにたいして、モナシュ大学のレスリー・ボディは、パンフレットをはじめとする啓蒙期ウィーンの通

俗読物が、まさしくこうしたさまざまな伝統的スペクタクルを巧みに話題として取り込み、逆に、これらに関する公衆の「知的好奇心」をかき立てることで、伝統的娯楽と相乗的に高揚しあいながら共存しえたのだと主張した(Leslie Bodi, Tauwetter in Wien, Frankfurt a.M. 1977, S.90)。さらに、この視点を継承したペーター・R・フランクらは、都市ウィーンにおけるメディアの受容、情報伝達とコミュニケーションの形態の問題により深く迫るためには、文字による「書物」に限定するのではなく、演劇興行を宣伝する「ピラ類」、さらには楽譜、都市景観図、銅版画など、あらゆる種類の印刷物を研究分析対象として取りあげる必要性を指摘している(P.R. Frank, Johannes Frimmel, Buchwesen in Wien 1750-1850, Wiesbaden 2008, S.19)。通常は読書研究の関心領域からは外れるはずのこうした印刷物が、ウィーンではおそらく、書物と啓蒙に関する人びとの興味をより増大させ、同時に、ごく未熟な識字能力しかもたない大衆を、強い魅力をもって読書の世界へいざなったと考えられるからである。

このような問題提起を踏まえて、代表者は、ヨーゼフ期のウィーンに流布した夥しい各種の印刷物のうちでも、破格の安値で大量に生産・販売されたニュース銅版画、とりわけ、ヒエロニムス・レッシエンコール(1753-1807)の作品を事例として扱うことで、このような図像メディアが、パンフレットなどの活字メディアとの相関関係の中で、いかなる社会的・文化的機能を果たしたのかという問題を、ある程度有効なかたちで明らかにしようという仮説を立てた。伝統的な「芸術としての銅版画」の枠組をあえて大きく逸脱して、事件、戦争、首都の流行・風俗、あるいは話題の人物などを取り上げ、簡略・粗雑な技法で大部数の版画を市場に送り出し、多大な利潤を得た版画作家兼美術出版業者、レッシエンコールの手法は、実際、パンフレット出版業と多くの共通点を含んでいる。すなわち、最新の出来事を瞬時にして伝える即時性とセンセーションリズム、薄利多売の営利主義など、商品としての企画、販売にかかわる基本方針はいうまでもなく、その内容に目を移すなら、これらふたつのメディアが、ヨーゼフ期を通じてほぼ共通の主題を扱い続けたことがわかる。レッシエンコールの銅版画は、コスト面からみて図版の挿入など望むべくもなかったパンフレットにとって、まさしく実質的な「挿絵」の役割を果たしていたといえる。また、テーマに関するこの完全な符合は、両者がほぼ同一の受容者層を共有していた事実の表徴とみなしうるだろう。

本研究では、まず、これまで扱ってきたパンフレットおよび通俗読物と関連させる視点から、レッシエンコールが制作した銅版画のテーマを詳しく分析する作業に着手した。レッシエンコールの銅版画は、図画作品であ

りながら、根底において明らかに強い叙述性をそなえていた。その「物語る画像」とパンフレットとの本質的な共通性に光を当てることによって、視覚にうったえる図像文化を活字とテキストの世界から機械的に分離しようとする、これまでの読書研究の地平に修正を加えることができると考えたからだ。とりわけ、「視覚的なもの」と「叙述的なもの」が融合しあうこれらの作品は、実際に、ウィーンの読者公衆がけっして均一な社会グループではなかったことをはっきりと示唆している。レスリー・ボディはすでに、ヨーゼフの治世下において、従来、文字文化と何ら接点をもたなかった社会層が、都市に氾濫したピラや広告など、書物に満たない印刷物を通じて、広義での「読者」の仲間入りを果そうとしていたことを指摘した。すなわち、十分な識字能力を身につけ、自力でテキストを読みこなしえたグループと並んで、いわば、「絵を読む人びと」が、メディアの受容者としてきわめて重要な役割を果たしたのである。そして、画面の下部に数行の平易な解説文を付すという形式で制作されたレッシエンコールの銅版画は、これらの人びとをこそ、印刷メディアの新たな受容者として掬い上げていったにほかならない。ちょうど刊行ブームを迎えていた新聞と定期刊行物を舞台に、鮮やかな広告作戦を展開しつつ、間もなく銅版画からさらに絵入り扇子やトランプ・カード、ボードゲームの生産へと活動領域を拡大していったレッシエンコールの営業のあり方は、大都市ウィーンにおいて印刷・出版市場を消費者として支えた「非識字者以上、読者未満」の大衆の存在と、かれらの趣味を跡づける表徴と見なしていいだろう。したがって、レッシエンコールがエッチング技術を用いて首都社会に提供した、夥しく多様な「商品」を史料として整理・分析することにより、これまで自署率や予約購入者リストに関する分析がつねに取りこぼしてきたこれらのグループを、新たに「読者」としてとらえなおすことが可能になると考えた。こうした問題提起を通じて、当時のメディアと公衆の現実のありさまに対するより精確なアプローチのいとぐちを探ることが、本研究の最終目標として強く意識されることになった。

### 3. 研究の方法

#### (1) 史料のデータベース化

##### 画像史料

本研究では、主要な史料として、ヒエロニムス・レッシエンコールの作品を中心に、18世紀ウィーンに広く流布した通俗的銅版画を扱った。その本質的な特徴として、まず、<a>これらが現地の博物館、美術館に所蔵されたオブジェクトであること、さらに、<b>従来、美学的評価の埒外に置かれてきたことから、収蔵館においても未整理に近い状態にあること、の二点に十分に配慮する必要があ

った。個々の作品は調査段階でサイズを測定し、技法、彩色の有無、彫り師・刷り師の署名、プリントマークの有無などを基礎データとして記録し、許可されている場合には作業用写真を撮影、撮影禁止の場合は画面のラフスケッチを残した。レッシェンコール作品の場合、1959年のペッチュナー・カタログと照合した上で、ここに未掲載の作品については別個にデータを保管していった。初年度から25年度にかけての現地史料調査では、画像史料を分析調査対象として容易に利用できるようにするため、このような方針に基づいてデータ化を進めた。

#### 広告史料

通俗銅版画などポピュラー・グラフィックを扱う際、最大の難点は、実際に流通した作品・商品の大部分が実際には散逸しているという点にある。収蔵庫の箱の中に眠る版画類のほかに、どのような印刷物が人びとの生活を彩っていたのか。その一端を示すのが、当時の新聞紙上を賑わした、美術出版業者らの広告文である。とりわけレッシェンコールはその生涯を通じて、ほぼ休むことなく夥しい量の新聞広告を発信し続けた。多くが散逸し、消滅しているという現物史料の偏りを補うために、これらの広告文に目を向けることは、本研究にとって不可欠の課題であった。したがって、25年以降は、1780年から1807年までの『ウィーン新聞』の巻末広告欄を中心に、レッシェンコールおよび同業者による広告文を拾い出し、データ化する作業を、同時進行で進めた。これらの広告文は、グラフィック作品だけでなく、銅版画技術を援用したあらゆる商品について、そのサイズ、ヴァージョンの種類(カラー版・白黒版など)ばかりでなく、価格についてとりわけ詳細に伝えるものであり、当時の経済・物価水準においてこれらの印刷物が占めた位置価値を探るためにも、きわめて有効な情報となった。

#### (2) ミヒャエル・ノルトの「文化の消費」パラダイム

レッシェンコールが銅版画技術を駆使して生み出した多様な日常文化アイテムへのまなざしは、研究の関心領域を「活字印刷物」という枠組の埒外へと導き出し、「読書」という限られたいとなみから、さらに広義における「文化」の享受へと拡大させることになった。こうした視点の広がりにもなあって、従来の読書研究が依拠したメソッドだけでは、ここでの史料分析と考察に十分に対応しきれなくなることは、当然の帰結であった。

文化の享受において、人びとが多様な情報交換のネットワークを確立し、その過程で、活字文化に代表される狭義の「メディア」にかぎらず、さまざまな「モノ」を介して体験を深めていくプロセスについて、明快な議論を展開したのが、グライフスヴァルト大学のミヒャエル・ノルト教授であった。その「文

化の消費」のパラダイムは、18-19世紀の文化史を読み解くためのモデル理論として、かねてから代表者の関心を強く惹きつけてきた。ノルト教授の著書、『人生の愉楽と幸福—ドイツ啓蒙主義と文化の消費』(原著2003年刊行)は、消費対象としての印刷物の問題から、演劇・音楽文化の受容、さらにはモードにいたるまで、まさしくレッシェンコールの制作・営業活動において本質的な底流をなした当時の社会の嗜好の趨勢を解析しながら、「文化消費財」とそれらをめぐる「受け手」の新しい行動規範を定義づけようとした、すぐれたスタンダードワークである。この書物を精読、翻訳する作業を通じて、代表者は、本研究テーマに適用可能な格好の方法論を得た。

#### (3) 版画に関する専門的知識

文書史料ではなく、美術工芸作品を主要な現物史料として取り上げるにあたって、「版画」という専門分野において基礎となる最低限の技法的知識をおさえることが、必須の前提条件となった。とりわけ、画像印刷物の大量生産を目指したレッシェンコールは、下絵や背景、人物像などを巧みにリユースし、生産段階に要する労力を可能な限り節約しようとした。その巧妙な工夫がどのような技術によってなされていたのかという問題も、銅版画、エッチングの具体的制作過程に照らして解明される必要があった。美術以外の分野からのアプローチが往々にして陥るナンセンスな誤謬を回避すべく、本研究では、初年度より、目黒区美術館学芸課の降旗千賀子氏、版画の修復を数多く手がける山領修復工房の山領まり氏、版画のコレクター・研究家として造詣の深い杜若文庫の森登氏らに助言を求め、レッシェンコール作品の図録や作業用写真をもとに、その技法的特徴について、できる限り詳しく意見を聞いた。

#### 4. 研究成果

##### (1) ヒエロニムス・レッシェンコール - ニュース銅版画からモード雑貨へ

レッシェンコールに関する分析は、まず、そのニュース銅版画作品を時系列的に整理し、テーマ・題材を再検討することから始まった。この作業を通じて、改めて、レッシェンコールの版画作品とパンフレットとの内容的な共通性が明らかになった。レッシェンコールを扱った数少ない先行研究が示唆したように、1780年代のニュース銅版画が、社会批判的な視点から話題を引き出すことによって公論を促しつつ、紛れもなくヨーゼフ期ウィーンの「啓蒙の担い手」として機能したことを、改めて確認しえた。

さらに、情報を迅速に、広い社会層へと伝える必要性から、「造形芸術」という枠組をあえて踏み越え、高度な技法と芸術性を犠牲にして薄利多売に踏み切ったレッシェンコ

ールのニュース版画は、ウィーンの文化史において前代未聞の「画像の大量生産」を確立したのであった。ここに初めて、銅版画は収集室のマットや額縁から飛び出し、一般の人々の間に「絵を消費する」という新たな行動様式を定着させたにほかならない。このことは、ウィーンにおける「文化の消費」を検討する際にも、きわめて重要なメルクマールとなるだろう。

その一方で、現存する作品のデータを3(1)で述べた広告史料のデータと照合して考察を進めてみると、今日、一般に版画家レッシェンコールの主要な活動領域とされているニュース銅版画という分野が、実際には、美術出版業レッシェンコール社の営業分野全体の中で見ればごく一部を占めたにすぎないという事実が明らかになった。時系列的な作品分析作業においても、ニュース銅版画は1780年から1796/99年ごろにかけて、ほぼ限定的に手がけられたジャンルであったことが確認された。広告のほか、遺産目録に記録された商品リストから見ても、紙扇子やボードゲーム、グリーティングカードなど、版画作品というよりはむしろ生活雑貨として分類しうる多様なアイテムが、実際にはレッシェンコールの営業活動の中で主流を占めていたことに、もはや疑問の余地はない。

現存作品と広告文とを比較対照するアプローチ方法は、モード雑貨という、これまでほとんど注目されてこなかったジャンルに対して、新たなまなざしを開くことになった。これらの商品がいかに同時代の人びとの心をとりにしたかについては、多くの回想録や書簡類に散見する紙扇についての感嘆を込めた言説からも、十分にうかがい知ることができる。だが、広告上に確認しうだけでもゆうに100種を超えるレッシェンコールの扇のうち、今日、博物館に現物が確認できるのはわずか11点にすぎない。このシビアな史料状況こそが、これらのジャンルを今日にいたるまで未踏の地のままに留ませた最大の原因であることは、言うまでもない。扇子をはじめ、これらのいわば「生活芸術品」の具体的細部が、日常使用による磨耗と消費物としての廃棄パターンのうちに失われ、再現不可能な状態にあることは、否定しようのない事実である。しかし、今回、本研究において試みた広告史料の援用という方法は、少なくとも、これらの商品が当時の人びとの日常生活の中に開いたパースペクティブの軌跡を再現するために、きわめて有効な手段であった。広告史料による「再現」作業は、仮説の域を完全に脱することはないとはいえ、活字物や一枚刷り版画など、固定した「印刷出版物」の枠組に固執する考察がけっして明らかにしえない、「文化の消費」をめぐる人々のハビトゥスに光をあてるための、重要な糸口になりえると結論した。(研究の過程、個々の分析作業およびその結論に関しての詳細は、「5. 主な発表論文等」のうち、2016年お

よび2018年の公刊論文を参照のこと。)

本研究の最初の出発点は、啓蒙のメディアの現実のあり方に接近するために、研究対象を活字出版物から画像印刷物へと拡大することにあった。研究プロセスの諸段階において、レッシェンコールを中心に、当時の画像印刷物、および画像印刷技術を応用した周辺ジャンルのアイテムについて体系的なデータ整理を行った結果、「画像印刷物」という分類ですら、18世紀後半から活気を増して展開しつつあった人びとの文化消費行動を説明するには十分ではないことが明証された。新しい思想や娯楽の形式、時代に即した新規の生活様式をより広い住民層に向けて伝播させ、また新たな知識として習得するために、当時の人びとは活字メディアに限らず、モノの流通や流行発信のネットワークをも媒介として積極的に取り込んでいったことは、ミヒャエル・ノルトがドイツの社会文化を事例に指摘したとおりである。ウィーンに関してもまた、このような視点に立って考察を進めることではじめて、ヨーゼフ治世下の啓蒙期から19世紀のビーダーマイヤー時代にいたる生活様式、行動規範の近代化、新しい文化行動の展開プロセスの細部を明らかにすることが可能となるだろう。

## (2) ミヒャエル・ノルトの文化消費論

体系的な先行研究が存在しない領域を新たに手がけるにあたって、当初より、有効かつある程度の普遍性を備えた方法論に沿って考察を進める必要性が強く意識されていた。そのため、24、25年度は、レッシェンコールと画像印刷物に関する調査と並行して、前述のミヒャエル・ノルト教授による文化消費研究の翻訳作業を行った。25年度にはノルト教授が来日したため、研究代表者は同教授を所属研究機関に招き、神戸市立博物館と共同で、文化消費と美術品についての小シンポジウムを開催した。ここでは、16-18世紀のヨーロッパからさらにアジアへと視点を広げつつ、「文化の消費とは」というテーマで議論を行い、関西圏の研究者らとの有意義な意見交換の場をもつことができた。

## (3) 一般向けの発信

本研究は公的な研究資金を得た研究プロジェクトであり、学会での成果発表と同時に、可能なかぎり、一般社会に向けて発信することにも努めたいと考えた。とりわけレッシェンコールの銅版画は、マリア・テレジアからヨーゼフ2世時代にいたるウィーンの世界のありさまを生き生きと視覚化した風俗画としての側面を備えており、こうした点においては、専門家に限らず、西洋の歴史やヨーロッパ文化に関心を持つ人びとの関心をもひろくとらえうるものではないかと考えた。このような観点から、研究代表者は、レッシェンコールの作品を一般に向けて紹介することにもできるだけ配慮した。その結果、2016

年から 17 年にかけて制作をサポートした NHK・BS プレミアム「ザ・プロファイラー 女帝マリア・テレジア」(2017 年 1 月 19 日放送)では、レッシェンコールの代表作、『マリア・テレジア最期の日』(1780 年)を番組内で紹介することができた。さらに、2017 年 6 月 24 日には、朝日カルチャーセンター川西教室において『銅版画で読む 18 世紀ウィーンの社会と文化』というタイトルでレクチャーを行い、レッシェンコールとその作品を 18 世紀ウィーンの社会文化史の流れの中で平易に解説した。限られたかたちではあるが、レッシェンコールという、現地においてすら十分に知られていない作家について、一般向けにある程度の紹介を行うことができたと考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

山之内克子、「18-19 世紀ウィーンにおける画像印刷物の社会文化史的意味 - ヒエロニムス・レッシェンコールを中心に」(前編)、『神戸外大論叢』、神戸市外国語大学研究会、査読あり、第 68 巻第 2 号、2018 年、111-128 頁

山之内克子、「18-19 世紀ウィーンにおける画像印刷物の社会文化史的意味 - ヒエロニムス・レッシェンコールを中心に」(後編)、『神戸外大論叢』、神戸市外国語大学研究会、査読あり、第 68 巻第 2 号、2018 年、129-160 頁

山之内克子、「18 世紀ドイツにおける啓蒙と文化のいとなみ - メディア、コミュニケーション、文化消費」、『史潮』、歴史学会、査読あり、新 72 号、2012 年、4-23 頁

〔学会発表〕(計 3 件)

山之内克子、「18 世紀末ウィーンにおける『出版物』としての銅版画 - ヒエロニムス・レッシェンコールを中心に」(ハプスブルク君主国啓蒙と専制読書会例会、2018 年 1 月 27 日、獨協大学)

山之内克子、「ヒエロニムス・レッシェンコールの銅版画 - 18・19 世紀ウィーンにおける図像メディアと文化の消費」(東欧史研究会、ハプスブルク研究会 合同個別研究報告会、2017 年 10 月 8 日、大東文化大学)

ミヒャエル・ノルト、山之内克子、岡泰正、「17・18 世紀のオランダ絵画ブームとヨーロッパの芸術市場」(神戸市外国語大学・神戸市立博物館連携講演会、2013 年 11 月 27 日、神戸市外国語大学)

〔図書〕(計 2 件)

山之内克子、「ヒエロニムス・レッシェンコールの銅版画 - 18 世紀ウィーンにおける「非活字印刷物」の位置価値」(69-90 頁)、

大内宏一編、『ヨーロッパ史のなかの思想』、彩流社、2016 年、364 頁

ミヒャエル・ノルト著、山之内克子訳、『人生の愉楽と幸福 - ドイツ啓蒙主義と文化の消費』、法政大学出版局、2013 年、390 頁

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者 山之内克子 (YAMANOUCHI, Yoshiko) 神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：70267441